

『日本アジア研究』第8号(2011年3月)

## 楊家将「五郎為僧」故事に関する一考察

松浦智子\*

明代に出現した二つの楊家将小説『北宋志伝』と『楊家府演義』には、楊業の第五子である楊五郎が契丹軍の囲みを抜け出し、五台山で出家する情節が見える。一方、宋代に編纂された複数の史書には楊業の息子が僧侶となる記述が見えない。では、史書には見えない「楊家将」の一員が「僧侶」となる故事は、どのような過程を経て出現したのだろうか。

最初に「楊家将」と「僧侶」が結びついた例が見えるのは、南宋の話本「五郎為僧」であるが、注目されるのは、その後の元雜劇などに見える楊五郎が、五台山と深い関係を持っていることである。

五台山は、仏教の靈場であるとともに、北辺に位置するという地理的条件から、古来、軍事的要衝でもあった。そのため、南北宋交替期の靖康の変の際には、五台山の僧兵たちが、抗金勢力となって金軍と戦った例が宋代の史書に複数みえる。こうした北敵の金と戦った山西五台山の僧兵の姿は、もともと西北系の軍人のために創設された南宋の瓦舎において芸能化されてゆき、それによって、同じく北敵の契丹と戦った山西の英雄「楊家将」の芸能と融合していったと推測される。その結果、五台山に出家し、対契丹戦で活躍する楊五郎の故事が出現したと考えられるのである。

キーワード：楊家将，五郎為僧，五台山

### 一、はじめに

明の嘉靖四十二年(一五六三)に成った『籌海図編』卷一一「僧兵」条には、「五臺之傳，本之楊氏。世所謂楊家鎗是也。」という記述がみえる。世に言われるこの楊家槍なる武芸をなした、五台山の楊氏とは誰を指すのであろうか。

明の時代、五台山の楊氏と来ればすぐに思い起こされるのが、北宋の忠臣楊家将の物語を描く長編小説『北宋志伝』と『楊家府演義』である。この二つの楊家将の長編小説では、太宗の寺参り(『北宋志伝』第一六回は五台山参詣とし、『楊家府演義』卷一第五則は幽州昊天寺参詣とする)を端緒に、以下のような情節が展開されている：

宋の太宗は、北辺の危険を考慮して諫言をする寇準(『楊家府演義』では八大王)を振り切り、五台山(『楊家府演義』では昊天寺)参詣にゆく。その警護を行う楊業親子。しかし、場所は契丹との国境沿い。案の定、太宗一行は契丹の軍隊に囲まれる。楊業父子は持てる力を振り絞り、何

\* まつうら・さとこ，日本学術振興会特別研究員 PD (埼玉大学教養学部)，早稲田大学文学部非常勤講師，中国文学。

とか太宗を守るが、長男、次男、三男は戦死し、四男の楊四郎は契丹軍の捕虜となる。そして、五男の延徳こと楊五郎は、契丹軍の囲みを抜け出し敗走し、五台山の僧侶となる。

『籌海図編』のできた明代中期には、楊五郎が出家して五台山の僧侶となる、「五郎為僧」の話が巷間に広まっていたのだろう<sup>1</sup>。二つの楊家将の小説では、僧侶となった楊五郎が、その後、度々五台山を下り、契丹の猛将蕭天左を降龍棒で降すなど対契丹戦の要所で大きな活躍をみせ、物語の展開上、關鍵となる人物として描かれている。

その一方で、楊業父子の事跡を記す北宋以降の正史や野史をひもといても、楊業の息子が僧侶となったという記述は全く見あたらない。しかし、史書類に楊家将と僧侶との関係を示す手がかりがなくとも、後世の楊家将故事に、楊家将の一人が五台山に出家し、戦闘で活躍するという要素がとり込まれている以上、「楊家将」と「僧侶」という二者が繋がりをもつにいたる、なんらかの要因があったと考えられるだろう。では、この楊業の息子・楊五郎が五台山に出家し僧侶となるという「五郎為僧」故事は、いかなる背景のもと、どのような過程をへて形成されてきたのだろうか。

## 二、楊家将の伝承化と宋代話本

そもそも、楊家将の故事は、北宋の初期に実在した山西の武将・楊業親子が契丹と戦った史実を物語化の出発点としている。契丹との戦いで非業の死を遂げた楊業と、楊延昭（楊六郎）を始めとした息子たちの事跡は、宋代すでに、『資治通鑑』、『隆平集』、『東都事略』などの複数の史書に記録がのこされており、元に成った『宋史』には、楊業、楊延昭、楊文广という楊家三代の伝がたっている。対契丹戦の英雄である楊一族の華々しい事跡は、人々の記憶にも強い印象を与えるものであったのであろう、次第に伝承化され、後世に伝えられてゆく。北宋中期に歐陽脩が楊業の弟の一族の楊琪のために書いた「供備庫副使楊君墓誌銘」には、

君之伯祖（楊）繼業，太宗時爲雲州觀察使。與契丹戰，歿贈太師中書令。

繼業有子延昭，眞宗時爲莫州防禦使。父子皆爲名將，其智勇號稱無敵。

至今天下之士，至於里兒野豎，皆能道之。（カッコ内補注，松浦。以下同）とあり、歐陽脩の生きた当時すでに、名将たる楊業とその息子楊延昭の武勇が広く知れ渡っており、天下の士から田舎の子供に至までみなその活躍を口にするのができた、と記されているのである。

このように、楊家将の事跡は早くも北宋中期には伝承化へ第一歩をふみ出していたのだが、この資料を「五郎為僧」故事の出現という観点からみると、未だそこには、「楊家将」と「僧侶」とのつながりを示す要素をみいだすことができない。では、「楊家将」に「僧侶」の要素が加わったのは、いつごろからなのだろうか。

最初に「楊家将」と「僧侶」が結びついた例がみえるのは、南宋の瓦舎で語られていたであろう芸能を記録した『醉翁談録』「小説開闢」の話本名である。『醉翁談録』「小説開闢」には、「楊令公」や「攔路虎」など、楊家将に関連する複数の話本名が記録されているのだが、その捍棒条には「五郎為僧」という、楊家の第五子が僧侶となって活躍した故事を語っていたと考えられる話本名

がみえるのである。ここで注目されるのが、この「五郎為僧」という話本名がのる挿棒条の筆頭に、『水滸伝』の魯智深の故事を語っていたと思われる「花和尚」という話本名がみえることである。

魯智深のあだ名である「花和尚」は、明代の『水滸伝』第一七回にみえる、「爲因三拳打死了鎮關西，却去五臺山淨髮爲僧。人見洒家背上有花繡，都叫俺做花和尚魯智深。」という魯智深自身の「背中に入れ墨模様がある」とのセリフによれば、「入れ墨のある和尚」という意味であることがわかる。だが、この「花和尚」の「花」には、「入れ墨」の意味のほかにも、「花公子（不良息子）」「花姑娘（あばずれ）」等の語彙から見てとれるように、「ろくでなし」「ならずもの」という含意がある。つまり、「花和尚」で「無頼の僧」という意味にもなるのである<sup>2</sup>。ならば、『醉翁談録』の「花和尚」という話本名は、南宋当時、瓦舎で語られていた魯智深のキャラクターが、無頼の僧侶であったということを示していたかもしれない。そもそも、「花和尚」や「五郎為僧」の話本が挿棒条に分類されている時点で、そこで語られていた故事が、棍棒をふるって荒事をなす僧侶の話であったことを表していよう。つまり、南宋の瓦舎では、武芸や荒事をなす楊五郎や魯智深といった「荒法師」の物語が、一つの話型として存在していた可能性が高いと考えられるのである。では、南宋の瓦舎で語られていたであろうこの荒法師の類型は、いかなる経緯で出現したものなのだろうか。

### 三、荒法師の類型

物語や俗文学に見える武芸に長けた僧侶の類型をたどってみると、宋代より以前の、唐代の伝奇に興味深い記事がみえる。晩唐に成った段成式『西陽雜俎』前集九には「盜侠」という項があり<sup>3</sup>、以下のような情節が展開されている：

唐の建中（七八〇-七八三）初，韋生が一僧侶と出会い意気投合し，僧侶の寺へと招かれる。しかし，いくら進めども寺に着かない事を不審に思った韋生は，僧侶が盜賊である事に気付く。韋生は得意の弾弓で僧侶を攻撃するが，僧侶はびくともしないので，韋生は諦めて攻撃をやめる。しばらくして，僧侶の屋敷に到着すると，僧侶は自分が盜賊であることを名乗り，盜賊家業から足を洗いたいという。そこで，僧侶は自分より腕の立つ息子の飛飛の殺害を韋生に依頼し，韋生と飛飛が激しい戦いを繰り広げる…（以下略）。

この話で注目されるのは，韋生の弾弓の攻撃にびくともしない僧侶が，盜賊家業を行っているという設定である。腕のたつ息子飛飛の殺害を韋生に依頼する際，僧侶は「不幸，有一子技過老僧。」とのべている。つまり，この盜賊僧侶も，息子飛飛には劣るものの，武芸に長けた無頼の僧侠として描かれているのである。このような，武芸を能くする僧侠は、『太平広記』卷一九六に引く北宋初の『北夢瑣言』「許寂」の項にもみえる。許寂は五代の後唐に実在した人物であるが<sup>4</sup>，その『太平広記』「許寂」項の後半部には，「於頭指甲下，抽出両口劍，跳躍凌空而去。」と，親指の爪から二本の劍をとり出し，跳躍して空へと飛びさる，異能の僧侠の姿が描かれているのである<sup>5</sup>。では，こうした唐や五代の武芸をなす僧侶の話は，いかなる背景のもと出現したのか。

ここで注意されるのは，五代後周の世宗が顯徳二年（九五五）五月六日に下

した仏教肅正の詔の内容である。というのも、『五代会要』や『旧五代史』に記録がのこる世宗の詔には、当時、逃亡軍人や犯罪者などで寺院に逃げ込み僧侶となるものが多いことが記されているからである。ことに、『五代会要』巻一二に記録される詔は、仏教肅正の具体的方策をあげる中で、犯罪者や逃亡軍人、入れ墨（瑕痕）のある軍人、悪逆の徒党、盗賊、スパイなどで剃髪して僧侶となる者について執拗にくり返し言及し、それらの者たちへの厳しい処断を求めているのである<sup>6</sup>。

詔がかくもくり返し、犯罪者や逃亡軍人、盗賊あがりの僧侶たちについて言及しているということは、こうした風潮が五代より以前、恐らくは、流賊あがりの軍人を多く擁する軍閥藩鎮が跋扈していた唐末ごろには、すでに存在していたであろうことを示しているだろう。

このことは、唐末の犯罪者上がりの軍人である成訥（?-九〇三）の伝に、「…少年任俠，乘醉殺人，爲讎家所捕。因落髮爲僧，冒姓郭氏，亡匿久之，及貴，方復本姓。唐僖宗朝，爲蔡州軍校，…。」（『旧五代史』巻一七）と、酔って人殺しをした成訥が僧形となって身を隠したとの記述がみえることや、同じく唐末の賊上がりの軍人である李罕之の伝に「…（李）罕之拳勇趨捷，力兼數人。少學爲儒，不成，又落髮爲僧，以其無賴，所至不容。…毀棄僧衣，亡命爲盜。」（『旧五代史』巻一五）と、無頼僧侶であった李罕之が盗賊となった、という記載がみえることから裏付けられるだろう<sup>7</sup>。

こうした、逃亡軍人や犯罪者、盗賊などが出家して僧侶となる事態は、北宋に入っても依然として続いていた。『宋会要輯稿』巻一四七〇六の道釈一には、北宋の天禧二年（一〇一八）三月に真宗が下した詔として、「…刑責、姦細、悪党、山林に隠れたる賊徒、罪を負って潜んでいる者、及びかつて軍隊にあって入れ墨（瑕痕）がある者は、みな出家することができない<sup>8</sup>」という、後周世宗の詔の内容を受け継いだごとき条文が記されており、同じく『宋会要輯稿』巻一四七〇六、道釈一に残る、仁宗の天聖八年（一〇三〇）三月の詔にも、同様の記述がみえている<sup>9</sup>。つまり、これらの詔から、無頼者の出家という事態が、北宋においても常態化していたことが伺われるのである。

そして、北宋時代のこのような事態に拍車をかけたのが、政府による「空名度牒」の売買であった。北宋政府は西夏や女真といった北辺の対策に、連年巨額の支出を余儀なくされており、軍費の補填のために、法名など未記入のままの「空名度牒」を広く売買していた。これにより、資格のないものが容易に度牒を取得することができ、僧侶を冒称する事態が起きていたのである<sup>10</sup>。

こうしたことが言えるなか、大きく注目されるのが、『五代会要』の「かつて軍門にあって、顔に入れ墨のある者を、何れの寺院にせよ、敢えて受け入れていた者（向曾在軍門，面帶瑕痕，逐處寺院，輒敢容受者）」や、『宋会要輯稿』の「かつて軍にあって入れ墨のあるものは、みな出家することができない（曾在軍帶瑕痕者，並不得出家）」、「身体に入れ墨のある者は、みな出家することができない（身有文刺者，並不得出家）」等の文句である。『五代会要』の言う所の「顔に入れ墨（面帶瑕痕）」をする制度は、もともと犯罪者に対して行われていたものであったが、唐末五代以後、おもに軍卒の逃亡防止のために、軍隊が兵卒の顔面に入れ墨をするようになったことが、『資治通鑑』等の史書に記されている<sup>11</sup>。となれば、『五代会要』のこの一文は、「顔に入れ墨（面帶瑕痕）」がある軍隊上がりの無頼者をうけ入れる寺院が、五代当時、少なからず

存在していたことを示しているだろう。さらに、『宋会要輯稿』の詔からは、身体の内側の部分に入れ墨をしている軍人出身者や犯罪者（「曾在軍帶瑕痕者」、「身有文刺者」）が僧侶となる現象が、北宋時代にもみえたことがわかるだろう。つまり、唐末五代から北宋当時、先に挙げた「花和尚」魯智深のように、身体に入れ墨をした軍人<sup>12</sup>や無頼者が、虚構の物語の中だけでなく、実際に僧侶となる事例が少なからずあったのである。

上記のごとく、唐末から北宋にかけて、荒事と縁の深い無頼者が、寺院にかくも複数まぎれ込んでいたのであるならば、このような実在の無頼の僧侶たちの存在が、物語や芸能のなかに登場する荒法師の姿に素材を提供していただろうことは、容易に想像がつく。つまり、こうした社会的背景が、『西陽雜俎』の「盜俠」や、『北夢瑣言』「許寂」に登場する僧俠の情節を生みだし、南宋で語られる「五郎為僧」や「花和尚」といった、荒法師が活躍する芸能の出現に筋道をつけていたと考えられるのである。

こうした荒法師の類型は、北宋が滅んだ後、金においても、俗文学のなかで語られていた。金の『董解元西廂記諸宮調』（以下『董西廂』と記す）に登場する普救寺の僧侶・法聡がそれである<sup>13</sup>。唐・元稹「鶯鶯伝」を原話とする『西廂記』のプロットは、南宋の劇目を記す周密『武林旧事』「官本雜劇段数」に「鶯鶯六幺」という題目がみえるように、金と同時代の南方でも好まれて上演されていた。当時南北を問わず流行していた『西廂記』のプロットであるが、金で成立した『董西廂』には、元ネタである元稹の「鶯鶯伝」にはまったく見えない、俠客あがりの荒法師・法聡が登場しているのである。

『董西廂』巻二では、叛乱をおこした蒲関（山西）の守備軍・孫飛虎が普救寺にせまり、これに対して法聡が三百人の僧兵をひきいて叛乱軍と戦う、という情節が展開されている。その際、【尾】声では、法聡の素性を紹介して、「這和尚是誰，乃是法聰也。聰本陝右蕃部之後。少好弓劍喜游獵。常潛入蕃國，盜掠爲事，武而有勇。」と、蕃部の後裔である法聡が、若いときから武芸を好み、盜賊家業を行っていた、と歌う。

この【尾】声以下では、法聡と孫飛虎軍の激戦が長々と描写されているのだが、巻二のこの場面は、『董西廂』の全体のなかではかなり異質な存在となっている。赤松紀彦他共著『『董解元西廂記諸宮調』研究』の「解説」は、『董西廂』における法聡の立ち回り場面の異質性を指摘しながら、「あるいはこの場面全体が、ある程度既存の立ち回りもの芸能を踏まえて作られているかもしれない」と言う<sup>14</sup>。もし、この説を踏まえて考えるならば、「鶯鶯伝」にはまったく見えない法聡という荒法師の類型が『董西廂』に出現したのも、金を遡る北宋のころから、荒法師の立ち回りを見せる芸能が少なからず流行し、俗文学に影響を与えていた結果であると言えるのではないだろうか。そして、こうした芸能の流行の背景には、やはり上述のごとき実在の無頼僧たちの横行があったと考えられるだろう<sup>15</sup>。

俗文学に登場する荒法師の類型が、このような筋道のもと出現してきたと考えられるなか、南宋の話本にみえる「五郎為僧」の楊五郎、「花和尚」の魯智深といった荒法師たちは、その後、元に入っても俗文学のなかで依然として姿をみせ続ける。元代に成った楊家将雜劇の無名氏『昊天塔孟良盜骨』や、水滸雜劇の康進之『梁山泊李逵負荊』等では、荒法師姿の楊五郎や魯智深が登場し、

雑劇の情節の展開上、大きな役をはたしているのである。

まず、楊五郎が正末に扮する『孟良盜骨』の第四節を見てみると、——幽州の昊天塔から楊業の遺骨を取り返し五台山興国寺に立ち寄った楊六郎が、生き別れとなっていた楊五郎と再会する。そこへ楊六郎を追って遼将・韓延寿やってくる、僧侶となっていた楊五郎がこれをうち殺す——という情節が展開されている。現存の『孟良盜骨』は、明の万暦年間に編まれた『元曲選』に収録される無名氏のものであるが、曹棟亭本『録鬼簿』に、元の至正年間の人である朱凱のなした『孟良盜骨殖』の題名が見えることから、これと同内容とおぼしき雑劇が元のころから存在したと考えられる。さらに、『録鬼簿続編』「諸公伝奇失載名氏並附於此処」に『盜骨殖』の正名として「殺人和尚退敵兵、放火孟良盜骨殖」の文字がみえることから、元代の楊五郎のキャラクターがやはり荒法師の類型であったことがわかるのである。

また、元初東平の人康進之の手になる『李逵負荊』では、主人公たる正末は李逵が扮するものの、魯智深も、宋江と魯智深を仮冒した宋剛と魯智恩という二盜賊を、李逵とともに殺す、という荒法師としての活躍をみせ、情節の展開上、大きな役割をはたしている。

そして、ここで注目されるのは、こうした元代の雑劇に登場する荒法師姿の楊五郎や魯智深が、山西の五台山という場所と深い結びつきをもっていることである。『孟良盜骨』第四折の舞台が五台山となっていることは先にものべた通りであるが、同折の【得勝令】では、楊五郎が「只我（楊五郎）在這五臺山呵又爲僧。」と、自分が出家した場所が五台山であることを唱っている。また、『李逵負荊』第三折の【幺篇】では、李逵が魯智深のことを唱って、「誰不知你是鎮關西魯智深、離五臺山纔落草。」といい、魯智深が五台山の僧侶だったことを明かしている。つまり、これらの歌から、元代の雑劇ではすでに、楊五郎も魯智深も、明代の小説と同じく、五台山に関係をもつ僧侶という設定になっていたということがわかるのである。

では、荒法師姿の楊五郎、魯智深が、五台山と結びつくという現象は、一体いつごろ、どのような背景から出現したものであり、そこにはどのような意味があったのだろうか。

#### 四、五台山と僧兵

五台山<sup>16</sup>は、主に山西省の五台县に属し、その東端は山西省と河北省との境界をなす太行山脈と接している。五台山の名称は、この山が、東台（望海峰）、西台（掛月峰）、南台（錦繡峰）、北台（叫斗峰）、中台（翠嶺峰）の五つの主峰を中心とした峰々からなることに由来する。

この山の霊場としての来歴は古く、唐『古清涼伝』や北宋『太平寰宇記』巻四九等に引かれる『水経注』の記述によれば、西晋の末、道家の神仙思想をもつ人々によって開かれ、俗に「仙者之都」や「紫府」などと呼ばれていたという<sup>17</sup>。このように、当初は神仙道の霊場であった五台山であるが、その後、「華嚴経」が中国に伝来すると、北魏のころには文殊菩薩の清涼山に擬せられるようになる。それに伴い、五台山では、次第に神仙道に代わり仏教が主位を占めるようになり、隋唐のころには、山の五つの主峰に各寺院が設けられ、歴代の皇帝がこの山を信仰の対象とするなど、仏教が隆盛を迎えていった。

そのご唐が滅び、五代も末期になると、五台山は北漢の領地となった。そして、宋の太宗の太平興国四年（九七九）に北漢が平定されるにいたって、五台山は北宋に所属することとなり、翌年から北宋政府により寺院の修理や税の免除といった、保護政策を受けるようになる。

ここで注目されるのは、『宋史』卷二八五の馮行己伝に、「五臺山寺，調廂兵義勇繕葺。」とあり、馮行己が存命した北宋中期に、五台山の寺院の修理にあたって、廂兵と義勇軍が徴発されていたとの記述がみえることである。つまり、北宋政府による五台山の保護政策に、廂兵と義勇軍という軍隊がかかわっていたのである。

そもそも、五台山は北辺に位置し、歴史的にみても軍事政策上、非常に重要な意味をもつ地帯であった。東端が太行山に接する五台山の峰には、鬱蒼と樹木がしげり、北辺から侵入する敵をはばむ天然の障壁となっていた。元代には、その防衛上の重要性から、勅命をもって五台山の樹木伐採を禁ずるほどであった<sup>18</sup>。こうした五台山の軍事上の重要性は、北宋と契丹の攻防がくり返されていた北宋代でも認識されており、『続資治通鑑長編』卷一七七には、契丹が蔚、応、武、朔等の北方諸州の人員を五台山に送り込み、スパイとして出家させていたとの記述もみえる<sup>19</sup>。

そして、さらにここで注意されるのは、十二世紀初頭に、松花江流域より突如として台頭しはじめた女真が北宋に迫ってきた際にも、五台山が軍事防衛の要衝として、少なからぬ機能をはたしていたということである。

もともと、五台山の寺院を構成する僧侶たちには、武芸や荒事をなす無頼出身の者が多くまぎれていた。北宋中期の人である韓復の墓誌銘「朝奉郎通判涇州韓君墓誌銘」<sup>20</sup>には、

…（韓復）改秘書省著作佐郎，知五臺山寺務司。五臺供施傾天下，惡少年多竄僧籍中，上下囊橐爲姦。號爲不可措手，君擿其魁宿置于法。…

とあり、五台山の僧籍のなかに「惡少年」たる無頼者が多くもぐり込み、「不可措手」と呼ばれるほどの暴れぶりをみせていたことが述べられている。こうした武芸や荒事にたけた無頼者出身の僧侶たちは、必然、五台山の軍事力、つまり僧兵となっていくと考えられる。そして、興味深いことに、五台山の軍事力たるこれらの僧兵が、北宋末期、北辺の女真勢力によってひき起こされた靖康の変（一一二六）前後に、金軍と戦ったという事例が複数みえるのである。

まず、南宋・徐夢莘『三朝北盟会編』<sup>21</sup>（一一九四年成書）卷四八、靖康元年（一一二六）六月六日辛丑条には、

…先是，統制武漢英，將京軍三千人救太原。以兵少，遂來眞定見（劉）韜，不與。漢英至五臺山見龐僧正，說龐僧正聚集本山僧，行往代州，欲劫金人之軍。未出五臺山界，遇金人戰不勝。漢英走入平定軍瑜珈寨。寨中推播木下打死。…

とあり、太原が金軍に包囲された際、太原統制官の武漢英の要請により、五台山の僧侶の龐僧正が五台山の僧兵をあつめ、金軍と戦ったとの記述がみえるのである。結果的には、龐僧正の僧兵軍は五台山を出ないうちに金軍に破れ、武漢英も戦死したが、この五台山の僧兵の動きは、いご続く抗金活動の序幕となつたとも言われている<sup>22</sup>。

さらに、同じく『三朝北盟会編』卷五一、靖康元年八月条には、

初、太原城中有將官楊可發者，面有六字，號爲楊麻胡。擦城出欲招集人，解圍到虞縣。約有衆千餘，忽邏得三人，乃繁峙縣東諸豪傑。不肯順番，差往探太原事者。可發遂隨此三人至五臺山北繁峙縣東天延村，招軍馬四十餘日，得二萬餘人，以五臺山僧李善諾、杜太師爲先鋒，將到繁峙縣東十里鐵家嶺，遇金人大戰，至晚衆皆散去。可發却上五臺山，副僧正眞希投拜。可發去五臺山，却入虞縣。有衆二千，遇粘罕大軍至。可發自知其不可敵，乃倚壁而立，以鎗自刺其腹而死。

とあり、太原の將官である楊可發が、五台山の僧侶の李善諾と杜太師を先鋒として、繁峙県の東で金軍と戦ったと記録されている。この戦いでも、やはり楊可發の抗金軍は金軍に破れているが、楊可發のごとき抗金勢力が、五台山の僧兵を戦力として積極的に活用していたことは、注目に値するだろう。

そして、さらに目をひくのが、南宋・李心伝『建炎以来繫年要録』（一二一六年成書）卷一四九にのる以下の記事である。

寶眞<sup>23</sup>五臺山僧。靖康中，嘗召對，俾聚兵討賊。金人生執，欲降之。寶眞曰：「我既許太宗<sup>24</sup>皇帝以死矣。豈妄言耶。」臨刑色不變。北人嗟異。

『建炎以来繫年要録』のこの項と同内容の記事は、『宋史』にも見える。『宋史』卷四五五「忠義」条「僧真宝伝」にのる記事には、

僧眞寶，代州人，爲五臺山僧正。學佛，能外死生。靖康之擾，與其徒習武事於山中。欽宗召對便殿，眷賚隆縟。眞寶還山，益聚兵助討。州不守，敵衆大至，晝夜拒之，力不敵，寺舍盡焚。曾下令生致眞寶，至則抗詞無撓。曾異之，不忍殺也。使郡守劉駒誘勸百方，終不顧。且曰：「吾法中有口四之罪，吾既許宋皇帝以死，豈當妄言也。」怡然受戮。北人聞見者，嘆異焉。

とあり、『建炎以来繫年要録』の内容をさらに詳しくかたり、五台山の僧侶である眞宝が、靖康の変に際して、五台山中で武芸の演習をおこない、僧兵を結集して金軍と戦ったとのべている。そして、金の軍に対して日夜抗戦し、敗戦して囚われの身となっても、北宋に忠義をたてて死を受け入れたとある。この眞宝の北宋に対する節義は、一つの美談となっていたのであろう。『建炎以来繫年要録』、『宋史』のほか、『続文献通考』、『補統高僧伝』、『新安文献志』、『清涼山志』、成化『山西通志』、『明一統志』ほか複数の書物が、眞宝のこの行為を記録しているのである。

## 五、抗金の英雄と南宋の芸能

以上挙げたように、靖康の変前後の時期に、五台山の僧兵が北辺から迫りくる金軍と戦うという事例が複数あったことが明らかになった。しかも、中には眞宝の例のごとく、多くの書物に記載され、後世によく知られる事例もあった。このように、五台山の僧兵が金軍と戦った事例が複数見える背景には、五台山の東端と接している太行山の西側の経路が、金軍の侵入路の一つとして使われていたことも関係していただろう<sup>25</sup>。そして、これらの点を総合すると、南宋のころにはすでに、五台山の僧兵が北辺の金軍と戦う抗金勢力の一部となっていたことが、広く知られていたと考えられるのである。五台山の僧兵が金軍と戦った事跡を記録しているのが、『三朝北盟会編』や『建炎以来繫年要録』といった、南宋にできた史書であったことも、その証左となるだろう。



もし、この説がなり立つならば、靖康の変以降、抗金勢力としてクローズアップされるようになった五台山の僧兵の勇猛な姿が、南宋の瓦舎で語られる、楊五郎や魯智深といった荒法師のキャラクター形成に、新たに素材を提供した可能性があるという指摘できるのではないだろうか。そして、このことは、対金戦争で活躍していた武将の話が、やはり南宋の瓦舎で語られていた記録がのこっていることから、裏付けられるのである。

『醉翁談録』『小説開闢』には、「新話説張、韓、劉、岳」という記載がみえ、南宋の瓦舎で、張俊、韓世忠、劉錡、岳飛<sup>26</sup>といった、いわゆる対金戦争の英雄である「南渡四将」<sup>27</sup>の話が行われていた形跡<sup>28</sup>がのこっている。このように、南宋の瓦舎において、対金戦争の英雄の語り物芸能が行われていたのであれば、靖康の変前後に、五台山や太行山付近に数多く出現した抗金勢力についての英雄譚が、芸能の俎上に乗っていた可能性は大いにあるといえるだろう。

実際、抗金戦争において功績をあげた武将が、芸能の俎上に乗っていた事例は、先にあげた「南渡四将」の「張、韓、劉、岳」だけにとどまらない。『建炎以来繫年要録』には、建炎三年（一一二九）十一月に金軍が長江を渡らんとした際、宋将が先をあらそって逃走するなか、水賊あがりの水軍統制邵青のみが、部下をひきいて金軍にたち向かったとの記載がみえる<sup>29</sup>。この後、邵青は落草と招安をくり返すが、こうした邵青の抗金戦における活躍の顛末が、当時、「小説」になっていたという記述が、『三朝北盟会編』卷一四九、紹興元年（一一三一）十二月八日条に以下のようにみえるのである。

紹興元年十二月、…邵青受招安、爲樞密院水軍總制。先是、杜充守建康時、有秉義郎趙祥者、監水門。金人渡江、邵青聚衆、而祥爲青所得。青受招安、祥始得脱身歸、乃依于内侍綱。綱善小説、上喜聽之。綱思得新事編小説、乃令祥具說青自聚衆已後蹤跡、并其徒黨忠詐及強弱之本末、甚詳編綴次序、侍上則說之。故上知青可用、而喜單德忠之忠義。

邵青集団の事跡を綴ったというこの「小説」は、内侍（宦官）の綱という者が高宗のために編んだものであるため、巷間の芸能と軌を一にして語ることはできないが、当時、こうした抗金の軍勢の活躍が、芸能や小説といった娯楽の題材とされる傾向が少なからずあったことは、この資料からも読みとることができるだろう。

このように、靖康の変前後に抗金戦で活躍した者たちの姿が、南宋の芸能において人気を博していたのなら、やはり、先に述べたとおり、五台山や太行山付近に出現していた西北系の抗金勢力についての話が、南宋の演芸場で芸能として語られていた可能性は非常に高いといえるだろう。このことは、南宋の芸能の中心であったと思われる臨安の瓦舎が、そもそもは、対金戦争に従軍した西北系の軍人の慰労を目的として創設された、という経緯をもつことから裏付けられる。

呉自牧『夢梁録』卷十九「瓦舎」条は、臨安の瓦舎の設立の理由を、  
杭城紹興間駐蹕於此。殿巖楊和王因軍士多西北人、是以城内外勗立瓦舎、招集妓樂、以爲軍卒暇日娛戲之地。今貴家子弟郎君、因此蕩遊。

と記述する。つまり、殿前都指揮使の楊和王が、軍中の将兵に西北出身のものが多かったため、まずは非番の士卒たちに娯楽を提供することを目的として妓女楽人を集めて瓦舎を設立し、そこへ民間人も出入りするようになった、というのである<sup>30</sup>。この楊和王こと楊存中は、対金戦争の功労者として非常に有名

な軍人であり<sup>31</sup>、彼の擁する軍中の将兵たちも、対金戦争に従軍した西北出身の猛者たちであった。ならば、瓦舎で上演された演目も、それらの演目を上演する「妓楽」たちも、彼らになじみ深い西北系の題材や人々であったことは想像に難くないだろう。

そもそも、南宋政権樹立以降に再組織された宋軍の構成を見てみると、その中心となっていたのは、西北出身者で構成された軍隊であった。河北や陝西出身の楊惟忠、王淵、韓世忠、張俊、苗傅、劉光世らが率いる西北出身の精鋭軍が、御營司の統制下、中央軍として五軍に編成され、南宋軍の中心部隊としてその中枢を担っていたのである<sup>32</sup>。中でも、韓世忠、張俊、劉光世の三人の驍將は、南渡以降、度重なる金軍の攻撃や、明受の乱といった内部叛乱から高宗を救った功績により、三大帥と称され<sup>33</sup>、南宋中央軍の中核となっていた。そして、三大帥や五軍といった中央軍の主力が西北系の軍卒を中心に構成されていた以上、首都臨安に西北系の軍卒が頻繁に出入りしていた可能性は非常に高いといえるだろう<sup>34</sup>。

となれば、南宋の首都臨安には、楊和王こと楊存中の率いる西北系の軍人だけでなく、劉光世、韓世忠、張俊ら三大帥麾下の西北系軍人も多く出入りしており、自然、娯楽機関である瓦舎などでは、彼らに喜ばれる西北系の英雄譚や語り物が多く行われるようになっていたと考えられるのではないだろうか。このことを裏付けるかのように、西北系の軍卒を率いる三大帥の劉光世、韓世忠、張俊のうち、韓世忠と張俊の語り物が、「新話説張、韓、劉、岳」というように、南宋の瓦舎でおこなわれていたことは、大いに注目されるだろう。そして、このように、西北の抗金軍卒を一つ大きな需要層とする南宋の瓦舎において、西北系の英雄譚や語り物が行われていたのであれば、当時の瓦舎には、五台山という西北の辺境で金軍と戦っていた西北の僧兵の話を受け入れる土壌が十分に備わっていた、と考えることができよう。

もし、この考え方がなりたつとすれば、南宋の瓦舎を一つの媒介として、晩唐のころから存在していた荒法師の類型の芸能に、対金戦争で奮闘した五台山の僧兵のモチーフがとけ込んでいった、という筋道を見出すことができないだろうか。つまり、ここから楊五郎や魯智深という荒法師と、五台山の結びつきが出現したと考えられるのである。

そして、話を本稿の本題である楊家将の「五郎為僧」に戻して考える時、上記でのべた筋道、つまり、楊家将の楊五郎と五台山の僧兵の二者が、互いに結びつきやすい要素をもっていたという考えには、補強材料も存在していると言えそうである。

先にも述べたように、楊家将の主題は、楊業親子が北宋の北敵である契丹と戦うというものである。これは、『資治通鑑』、『隆平集』、『東都事略』といった宋代の複数の史書が、楊家対契丹戦で活躍した事跡を多く述べていることから明らかである。そのために、楊業親子の契丹戦争での活躍が、北宋の当時、人口に膾炙し、楊家将の物語化の根幹部分をなしていたことも、先に挙げた「供備庫副使楊君墓誌銘」の資料に見えたとおりである<sup>35</sup>。

このような事が言えるとき、金という北敵と戦う五台山の僧兵の姿は、契丹という北敵と戦う宋の楊家将の姿と、結びつきやすいものであったと言えるだろう。つまり、この二者は、「北敵」と戦う「忠国の英雄」という共通項を持っていたがために、とくに、祖国のために北敵と戦ってきた西北系の将兵を大

きな需要層の一つとする南宋の瓦舎において、接近し融合していったと考えられるのである。そして、さらに言えば、僧兵たちが活躍した山西五台山という場所が、楊家将が活躍した山西の代州や楊業が死没したとされる朔州陳家谷などの地と非常に近かったという地理的な要素も、この結びつきを強めた一因であったと言えるだろう。

## 六、おわりに

明の万暦年間に僧侶の鎮澄が五台山の諸事について記した『清涼山志』巻三、第四、諸寺名跡の「太平興国寺」の項には、以下のような興味深い記述が見える。

太平興国寺，樓觀谷。宋沙門睿見結廬於此。…太宗平晉，聞師道，詔見行宮，勅建寺，賜額太平興国。以師主之，即楊五郎之師也。中有五郎祠。五郎之後眞寶，代州人，以義爲質，能外死生，欽宗厚遇。靖康之乱，寶爲金僧所獲，庭抗不禮。金不忍殺，百方勸誘，終不顧，且曰，吾許宋皇帝以死，爲佛弟子，豈當爲妄言耶。怡然受戮。上聞痛悼不已，立祠本寺。

…

つまり、五台山樓觀谷にある太平興国寺は、宋の睿見という僧侶が当地に庵を結んだことに始まり、この睿見は楊五郎の師で、太平興国寺の中には「五郎祠」があるというのである。そして、注目されるのは、鎮澄の『清涼山志』が、この楊五郎の記事に続けて、靖康の変の際に僧兵を出して金軍と戦い、俘囚となっても宋に対する節義をまげなかった真宝についての事跡を記述しているということである。

睿見（または睿諫に作る）が太平興国寺を創建するに至った経緯を記した最初の書物は、北宋にできた延一の『広清涼伝』巻下「釈睿諫」の条であるが<sup>36</sup>、当然のことながらそこには、楊五郎や真宝の事跡については一切記されていない。残念なことに、五台山に関する专著は、南宋、金、元の時代には見あたらないことから、この太平興国寺と楊五郎、真宝の結びつきがいつ頃出現したかは、よく分からない。しかしながら、明代の書物とは言え、『清涼山志』においては、対契丹戦における忠国の英雄・楊五郎と、対金戦における忠国の英雄・真宝が、数ある五台山の諸寺の中でも、同じ太平興国寺<sup>37</sup>の僧侶として記録されているのである。このことは、山西という地域において契丹という北敵と戦った楊家将の姿が、同じく山西の五台山において金という北敵と戦った僧兵の姿と、やはり結びつきやすい要素を持っていたということを示しているだろう。

こうした事を踏まえて考えるとき、「楊家将」の故事に、楊一族の一員が「僧侶」となるという、本来史書には見えない話を取り込まれたのは、以下のような流れの中から出現したと考えられるのではないだろうか。

——楊家将が対契丹戦において活躍をし、楊家将の物語化への第一歩を踏み出していた北宋期には、同時並行的に、実在の無頼僧の横行を背景として、荒法師が立ち回りをみせる芸能が少なからず流行していた。その後、南北交替期になって靖康の変が起きると、抗金勢力として五台山の僧兵が活躍する。そして南宋に入ると、北敵の金と戦った五台山の僧兵のモチーフが、以前から行われていた荒法師の芸能にとけ込みながら瓦舎などで語られ、それによって、同じく北敵の契丹と戦った山西の英雄「楊家将」の芸能と融合していった。そ

の結果、五台山に出家し、対契丹戦で活躍をする荒法師の楊五郎が出現した。

以上の推論が正しいとすれば、靖康の変の後に展開された南宋の話本「五郎為僧」では、すでに五台山と楊五郎が結びついていたと考えられる。そして、もしこのようなことが言えるのなら、山西の英雄「楊家将」という北方系の故事の話柄形成過程を考えると、五台山の僧兵を含めた西北辺の軍事性・武力性を備える諸勢力の動静に対しても、十分に注意を払ってゆく必要があるとは言えないだろう。

※ 本稿は、平成二十二年度日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 21-5852）の交付を受けた研究成果の一部である。

<sup>1</sup>もちろん『籌海図編』の記述は「五台」の「楊氏」となっており、必ずしもこれが「楊五郎」を指しているとは断定はできないが、元雜劇で既に楊五郎が五台山で出家する設定になっていることや、明代にできた五台山の地誌である『清涼山志』に、「五郎祠」や「楊五郎」の名前が見えること等から、明代中期には、「五台」の「楊氏」で「楊五郎」を連想する図式ができあがっていたと考えても差し支えないだろう。

<sup>2</sup>高島俊夫『水滸伝の世界』「十七、豪傑たちのアダ名」（大修館書店、一九八七）。また、竺沙雅章氏が、その論著「宋代賣牒考」（『中国仏教社会史研究』第一章、同朋舎、一九八一。初出一九七九）において、魯智深のあだ名「花和尚」の「花」を、「ニセ（偽）」と読んでいることは注目される。

<sup>3</sup>同じ記事が『太平広記』卷一九四に「僧侠」として録される。

<sup>4</sup>『旧五代史』卷七に伝が見える。

<sup>5</sup>「許寂」に収録されるこの故事の、異能の人物が剣をふるって空へ飛び去るという姿は、道教的なものとも言え、後に、呂洞賓などの劍仙の故事へ発展してゆく要素もっている。しかし、僧侶が剣という武器を持ち、能力を発揮する、という点自体から見れば、やはり、そこには、荒法師の系譜に繋がる武芸をなす僧侶の姿の一端が見いだせるだろう。この点から言えば、五代の当時、こうした武芸をなす僧侶と道教的異能者の故事は、まだ未分化の状態であったのだろう。

<sup>6</sup>『五代会要』卷一二：「一、應曾有犯遭官司刑責之人、及棄背祖父母、父母逃亡、如奴婢、姦人、細作、惡逆徒黨、山林亡命未獲賊徒、負罪潛竄人等、並不得出家剃頭。…一、自前、多有逃遁軍人投寺院出家、在所僧徒不畏官方、便與剃削。起今後、有向曾在軍門、面帶瑕痕、逐處寺院輒敢容受者、其本人及師主、三綱知事、鄰房同住僧等、仰密切收捉禁勘申奏。…一、應有僧尼衷私窳置院舍、私與人剃頭受戒、及容賊盜、惡逆徒黨、姦細、背軍之人、輒披剃者、其僧俗中有能告官、及地方分所由節級自取捉到者、以本犯僧尼衣鉢資財、充給優賞。」、『旧五代史』卷一一五：「漏網背軍之輩、苟剃削以逃刑、行奸爲盜之徒、託住持而隱惡。」

<sup>7</sup>李罕之は、成汭とは異なり、無頼漢であったため僧として食い詰め、盜賊となったケースであるが、もと僧侶が盜賊となり、さらには軍人となるこの様なケースも、当時、犯罪者、盜賊、軍人といった荒事をなす者たちと、僧侶との境界線が非常に低いものであったことを表すものとして注目される。

<sup>8</sup>…刑責、姦細、惡黨、山林亡命賊徒、負罪潛竄、及曾在軍帶瑕痕者、並不得出家。

<sup>9</sup>…或曾犯刑責負罪逃亡、及景跡凶惡身有文刺者、並不得出家。

<sup>10</sup>空名度牒の売買については、前掲注二竺沙「宋代売牒考」や、牧田諦亮『中国仏教史研究』第三「第二章、民衆仏教の展開」一〇五—一〇七項、（大東出版社、一九八八）等に詳しい。

11『資治通鑑』卷二六六：「士卒失主將者，多亡逸不敢歸。帝（朱全忠）乃命，凡軍士皆文其面，以記軍號。軍士或思鄉里逃去，關津輒執之送所屬，無不死者。」、『資治通鑑』卷二六五，天佑三年九月条：「乃命勝執兵者，盡行文其面，曰「定霸都」，士人則文其腕或臂，曰「一心事主」。於是，境內士民，穉孺之外，無不文者。」

12唐末、五代、宋の軍人の入れ墨については、曾我部静雄「五，宋代軍隊の入墨について」（『支那政治習俗論攷』，筑摩書房，一九四三）に詳しい論考が見える。

13以下『董解元西廂記諸宮調』に関しては、主に赤松紀彦他共著『『董解元西廂記諸宮調』研究』（汲古書院，一九九八）を参考にした。また、『董西廂』に登場する法聡が、荒法師の類型の一であることは、つとに小川環樹「魯智深とその類例」（『中国小説史の研究』，岩波書店，一九四三）において言及されている。

14注一三掲『『董解元西廂記諸宮調』研究』の「解説」を参照。

15ここで注目されるのは、金と同時代の南方政権である南宋の法律文書『慶元条法事類』（一二〇二年成書）卷五一、道釈門、雜勅の条に、「諸僧徒，輒習武藝，及誑説劫運以惑衆者，徒二年，配五百里。」という条文がみえることである。武芸を身につけ誑説をおこなって民衆を惑わす無頼の僧侶がいたことを記録するこの条文からは、「芸能」という形態こそとってはいないが、僧侶が武芸を用いることで多数の民衆を扇動していた様子が見て取れる。ここから、当時、「武芸」と「僧侶」の両者が密接に結びつき、不特定多数の民衆を動かすうる一定の力となっていたことが伺われる。

16五台山の来歴を記す基本的な資料には、唐・慧祥『古清涼伝』二卷，北宋・延一『広清涼伝』三卷，北宋・張商英『続清涼伝』二卷，明・鎮澄『清涼山志』十卷などがあるが，南宋、金、元の時代には，五台山に関する専著は見あたらない。また本稿では，五台山の来歴などに関しては，日比野丈夫、小野勝年共著『五台山』（平凡社，一九九五，初出一九四二）の記述を参考にした。

17『太平寰宇記』卷四九：「水經云，五臺山五巒巍然，故謂之五臺。晉永嘉三年，雁門郡蓨人縣百餘家，避亂入此山。見山人，爲之先驅。因而不返，遂寧巖野。往還之士，稀有望見村居者，至詣訪，莫知所在。故俗人以此山爲仙者之都焉。中臺山山頂方三里，近西北陔有一泉，水不流。謂之太華泉。蓋五臺之層秀。仙經云，此山名紫府。常有紫氣，仙人居之。」

18『元史』卷二七

19『統資治通鑑長編』卷一七七、至和元年（一〇五四）九月丁亥条：「時雄州言契丹遣蔚、應、武、朔等州人來五臺山出家，以探刺邊事，故條約之。」

20黄庭堅『山谷集』卷二二

21以下『三朝北盟會編』のテキストは、上海古籍出版社の光緒三十四年本を底本として用い、文海出版社の光緒四年本と四庫全書本を校本として用いた。

22黄寬重著『南宋時代抗金の義軍』（聯経出版，一九八八）「第二章，高宗初期的義軍」三四項。

23『建炎以來繫年要録』のこの記事は，五台山の僧侶の名前を「寶眞」に作るが、『宋史』、『統文獻通考』、『補統高僧伝』、『新安文獻志』、『清涼山志』、『（成化）山西通志』等に載る同様の記事ではみな僧侶の名を「眞寶」に作る。本稿では，ひとまず『宋史』等の記述に従い，以下地の文において僧侶の名を「眞宝」と表記する。

24『建炎以來繫年要録』のこの記事では，「太宗」が眞宝（宝眞）とやりとりをしたとされているが，時代的に考えれば両者のやりとりは成立しない。『宋史』や『清涼山志』等は，この部分を「宋皇帝」に作っていることから，『建炎以來繫年要録』の「太宗」の記載は，何らかの混乱の結果生じたものだと考えられる。

25村上正二「宋・金抗争期における太行の義士（一）」（『大正大学院研究論集』三，一九七九）八九項。

26「張、韓、劉、岳」が張俊、韓世忠、劉錡、岳飛を指しているだろう事は，『四庫全

書総目』巻六一、史部十七、傳記類存目三に『南渡十將傳』十卷。宋・章穎撰。十將者、劉錡、岳飛、李顯忠、魏勝、韓世忠、張俊、虞允文、張子蓋、張宗顔、吳玠也。」とある事から推測される。また、胡士瑩『話本小説概論』上「第八章、宋元以来官私著述中所載の宋人話本名目」も、『醉翁談録』の「張、韓、劉、岳」を張俊、韓世忠、劉錡、岳飛だとする。

<sup>27</sup>『文淵閣書目』巻三「兵法」に、「南渡四將傳、一部二冊」の書名が見える。

<sup>28</sup>例えば、韓世忠に関して言えば、南宋・羅大経『鶴林玉露』巻一四「蘄王夫人」条に、後に韓世忠の妻となる妓女が、夜中の宮中で、まだ無名だった韓世忠を、虎の姿と見間違える、という物語的要素を含んだ説話が載録されている。これは、韓世忠についての発跡変泰の物語が、『鶴林玉露』が出来る頃には、巷間に流布していたことを示しているだろう。

<sup>29</sup>『建炎以来繫年要録』巻二九、建炎三年十一月二十一日条

<sup>30</sup>『夢梁録』のこの記述を引き、南宋臨安の瓦舎がもともと西北系の軍人のために創設されたものであるということをも指摘されたのは、小松謙『楊家府世代忠勇通俗演義』『北宋志伝』一武人のための文学』（『中国歴史小説研究』第六章、汲古書院、二〇〇一。初出『阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集 アジアの歴史と文化』、汲古書院、一九九七）である。本稿の以下の論述は小松氏のこの指摘に大きく啓発されたものである。

<sup>31</sup>『宋史』巻三六七に伝が見える。

<sup>32</sup>『建炎以来繫年要録』巻五、建炎元年：「東京禁衛寡弱、諸將楊惟忠、王淵、韓世忠以河北兵，劉光世以陝西兵，張俊、苗傅等以帥府及降盜兵，皆在行朝不相統一。於是始置御營司，以總齊軍中之政令。因其所部爲五軍。」

<sup>33</sup>南宋・莊綽撰『雞肋編』巻中：「紹興中，統兵有神武五軍及劉光世、韓世忠、張俊三大帥，都計無二十萬衆。…」

<sup>34</sup>実際、『建炎以来繫年要録』巻一一二、紹興七年七月条には、「都督府請，諸軍有面刺大字及燒灸人，不許入皇城門。從之。時西北忠義人，多有刺面爲「殺敵報國」等字。故申明焉。」との記載が見え、軍人で顔面に刺青をしている者が皇城に入る事を禁止する「都督の請」が出された理由として、「西北忠義人」なる西北系の軍人が多く顔面に刺青をして皇城に出入りしていた事が挙げられている。この条文から、当時、首都臨安に西北系の軍人が少なからず出入りしていたことが読み取れるだろう。

<sup>35</sup>本稿第二節前掲「供備庫副使楊君墓誌銘」本文参照。

<sup>36</sup>それによれば、睿諫は北漢雲州の人で俗姓を劉氏といい、五台真容院僧統大師繼顛の弟子であった。楼観谷の鹿泉に結廬し、ある日みた夢を機縁に白鹿寺を建てた。後、太宗の北漢平定を期に、白鹿寺は太平興国寺の寺号を賜ったという。

<sup>37</sup>この太平興国寺は現存しており、寺の中の「五郎廟」には五郎が使用したとされる鉄棍などが伝わっている。当該寺院の文物に関しては、白換采編著『五台山文物』（山西人民出版社、一九五八）の「太平興国寺」項を参照。

## 關於楊家將〈五郎為僧〉故事的考察

松浦智子

明代的兩部楊家將小說《北宋志傳》及《楊家府演義》中有楊業第五子楊五郎衝破契丹軍的包圍，在五臺山出家的情節。而編撰於宋代的多部史書中卻不見楊業之子成為僧侶的記述。那麼，在史書裡沒有留下記載的“楊家將”一員成為“僧侶”的故事是在怎樣的過程中出現形成的呢？“楊家將”與“僧侶”結合在一起的例子最早可見於南宋話本《五郎為僧》，而值得注意的是，在其後的元雜劇等中出現的楊五郎與五臺山有著密切的關係。五臺山不僅是佛教的道場，因其地處北方的地理條件，自古以來也是備受重視的軍事要地。因此在南北宋交替期的靖康之變時，五臺山的僧兵們作為抗金勢力與金軍交戰的事例在宋代的史書中多有記載。與北敵金國交戰的山西五臺山的僧兵的形象，在原本為西北軍人創設的南宋瓦舍中被文藝化，因此跟同樣是與北敵契丹作戰的山西英雄“楊家將”的文藝融合到了一起的情況也就不難想像。其結果是導致了於五臺山出家、在抗擊契丹戰爭中大顯身手的楊五郎的故事的出現。

**關鍵詞：**楊家將，五郎為僧，五臺山